

皇長孫殿下の御降誕を祝し奉りて

盛岡 菅原文一郎

契御縁
れ階じうにたまひする
れ
我が大君と
皇長孫のまづらん
うにたまひする
う
君泛波う秋みゆ
萬べ静る津ぐ
歳るかほ島み
と龜なひ根の露
雲に舞ゆる四の露
祝ひまつれよ
我が大君と
皇長孫のまづ
とほきまつれよ
方ながたれよ
に
仰ぐべき
御降誕
千代かけ
富士の巒
とことははに
うああ身
たじなまくに
ふだばれさう
なづらかのけ
りもにる
君い海山枝
萬さわわ威
歳やかがの
を國聲ひ
民になかり
り

海水浴 濱 子

濱の松風音清きはとりに、海水浴するは夏の愉快
のひとつにこそあれ、我國にては十年あまり前よ
り此事行はれ來りつ。其有益なること、やうく
人の知る所となりて年を逐うて盛になりぬ。さて
海水浴の人體に有益なるは、海水中にくめる鹽
素、あるはソヂユームの、皮膚をとほして人の體
内に入り、體熱の爲に化學的變化を起すによるな
り。又波動の作用、海濱の清空氣も相待ちて効を
奏するものなりとぞ。我國にて、はじめて行はれ

唱も振り仰
へるふへき
てとます見
てもまでま
人」にて

たる場所は、房州館山のほとりなるが、其後各地に行はれて、現に海水浴場として著名なるは、大磯江の島、逗子、鵠沼、興津、舞坂、須磨、明石、舞子などなり。これらはみな旅館など列ねて、たふとき人あるは外國人の集まる所ときけば、いかにはなやかに都にもおとらずさわがしからん、とぞおぼゆる、かゝらん所よりも、なほかたるなかの静なる海邊に浴したらんこそよからぬ、と思はるゝもかたくなる心からにや。

我故郷にて、皆人の海水浴するは、和歌浦と荒濱にて、いづれにも夏は我家にほど近き川より、日々浴客をのする舟のゆき、すれば、われらゆくにはいとたよりよし。ある年の夏歸省して、八月のはじめにもやありけん、一日荒濱にゆきたることありき。其日は空明かに晴れわたりていとこゝち

よき日なりけるが、なにがしの君に誘はれて、そが母君と三人して行きぬ。舟は大橋とよぶ橋の下よりいでたり。時は正午にして、且つ乗合多かりければ、いと暑く苦しかりき。かの海に涼しく浴せんと思へばこそかゝる苦もすなれ、と母君の小聲にのたまふもをかし。いつしか舟は荒濱につきければ、下りて浴客休息所にしばし休む。小屋は丸木の柱によしの屋根なれども、いと廣らかにて中をいくつにも分ちたる、いとたよりよし。顔いと黒きおきなとおうな、茶など煮て客の用を待てり。後は一帯に松生ひ茂り颯々の音いとこゝちよく、前よりは潮風のたえず吹き來るいと涼し。殊にけふは濱の名にはたがひていとしづかなれば、浴客甚だ多く、二ヶ所に設けたる休息所いづれもみちくたり。さてしばしわりて三人とも輕やか

なる衣着て、うちつれて海水に浴す。たれもたれも、休息所にて借りたる麥藁帽子のいと大きなるをいただける、其さまいとをかし。おのれもその一人なりしを、いまさら思へばはづかし。向には淡路島はのかに見え、左には難賀崎の突き出でたるけしきいはんかたなし。潮風に吹かれつゝ水にたゞみ、浪の來るごとに立ち上りなどすることよさ。筆につくすべくもあらず。深き所に水をちらして游泳するをのこあれば、いと淺き所に貝たづねるをとめ子あり、おのがじゝ浴せるさまいとたのしげなり。さてあまり永きもよからねば、とて、十五分ばかりにしてくがに上り、休息所に入り、衣をかわかしてとの舟に歸りたり。川をさかのぼりて家に歸りたるは、六時ごろならしやうにおぼゆ。

この濱かの浦今は山川百里をへだてたり。海水浴の好時期なるきのふけふ、いかに多くの人のかしをさして行くらん。この濱の松風はいまもなほ浴客の心をや洗ふらん。かの浦の潮風はいまもなほ浴客の面をや吹き拂ふらん。あゝ海水浴あゝ荒濱あゝ和歌浦。



女學生と浮華文學

人の心に、最强烈なる刺撃を與へるもの、中で、一番に効力のあるは、感情が激發せる時に、